

家族機能から見た大学生の家族意識 : 日本・韓国・中国における国際比較

著者	金 愛慶
雑誌名	名古屋学院大学論集 社会科学篇
巻	51
号	1
ページ	81-92
発行年	2014-07-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000120

〔論文〕

家族機能から見た大学生の家族意識

— 日本・韓国・中国における国際比較 —

金 愛 慶

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

本研究では、日・韓・中の大学生を対象に家族機能の側面から家族意識を比較した。家族機能はFACES IIIを用いて測定され、各国の複数地域の大学生、日本341名、韓国283名、中国321名から有効な調査協力が得られた。FACES IIIの因子的妥当性を検討するために3国のデータをプールした因子分析を行い、「相互依存性 (FAC1)」、「凝集性 (FAC2)」、「適応性 (FAC3)」の3因子が抽出された。国家と性別による2要因の分散分析を行った結果、すべての家族機能因子で女子大学生の得点が有意に高かった。国家による主効果も見られ、中国の大学生がすべての因子において最も高い得点を示した。韓国の大学生は、「相互依存性」と「適応性」で中国より低く、「相互依存性」と「凝集性」で日本より高い得点を示した。日本の大学生は、すべての因子において中国より低い得点を示し、「相互依存性」と「凝集性」で韓国より低かった。性別と国家によるこのような差については比較文化的観点から考察が行われた。

キーワード：家族機能、国際比較、日本、韓国、中国

Undergraduate Students' Sense of Family from Family Functions:

A Cross-Cultural Study in Japan, South Korea, and China

Aekyoung KIM

Faculty of Health and Sports
Nagoya Gakuin University

発行日 2014年7月31日

Abstract

This study compared undergraduate students' sense of family in Japan, South Korea, and China from family functions. Family Functions were measured by FACES III (Family Adaptation and Cohesion Evaluation Scales III), and 341 Japanese, 283 South Korean, and 321 Chinese students from multiple regions of each country completed the questionnaire. In order to examine the factorial validity, a principal factor analysis was conducted for FACES III in the pooled sample, and 3 factors were extracted by Varimax rotation; 'Interdependency (FAC1)', 'Cohesion (FAC2)', and 'Adaptability (FAC3)'. A two-way ANOVA was performed on these factors to compare the differences among the countries across genders. As for the results, female students showed significant higher scores on all factors. The main effects of the countries were also significant on all factors; Chinese students showed the highest scores on all factors; South Korean students showed lower scores on 'Interdependency (FAC1)' and 'Adaptability (FAC3)' than Chinese students and higher scores on 'Interdependency (FAC1)' and 'Cohesion (FAC2)' than Japanese students; Japanese students showed lower scores than Chinese students on all factors and lower scores than South Korean students on 'Interdependency (FAC1)' and 'Cohesion (FAC2)' as well. All these differences by gender and country were considered from a cross-cultural perspective.

Key words: family function, cross-cultural comparison, Japan, South Korea, China

1. はじめに

家族とは「夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な構成員とし、成員相互の深い感情的係わりあいでは結ばれた、第1次的な福祉志向の集団である」と定義される（森岡・望月，1983）。家族の果たす機能については文化人類学、経済・社会学などさまざまな分野の学者たちによる多様な見解が示されている。アメリカの社会学者Ogburn（1929）は、前近代の家族機能として「経済・地位付与・教育・保護・宗教・娯楽・愛情」の7つの機能を挙げた。さらに、Ogburn and Nimkoff（1955）は、近代産業化による家族機能の縮小について説いており、産業化とテクノロジーの発展によって伝統的な家族機能のうち愛情以外の機能は家庭の外へと外部化されるようになったと指摘し、伝統的な家族機能の低下、中でも家族の持つ教育機能が著しく低下したことを強調した。

家族は子どもの成長の場となり、さまざまな支援や教育が与えられる重要なサポート源であることから、心理学の領域では家族機能が個人の人格発達や社会適応に及ぼす影響に関する研究が発達心理学や家族心理学の領域を中心に盛んに行われてきた（Touliatos, Perlmutter, & Straus, 1990）。

第二次世界大戦後、逸早く経済発展を成し遂げた日本に続いて韓国・中国の経済発展も目覚ましく、核家族の拡大や少子化といった共通した社会現象が報告されるようになり（裴，2012；李，2000；松江，2012），日・韓・中3国における家族形態や機能をめぐる状況にも明らかな変化が起きている。

そこで、本研究では日・韓・中3国の交流の担い手となる大学生を対象に家族機能から見た家族意識を調査し、各国における家族力動の特徴を検討することとした。その背景は、個人の発達や社会的な適応において重要な役割を果たす家族機能に対する意識を比較・検討することは、3国の家族力動における特徴を理解する、また3国の大学生が相互を理解する上で一助となるほか、家族関連の諸研究交流においても有意義な示唆を与えると期待されるからである。

2. 方法

2-1. 調査協力者

1年次から4年次までの大学生を対象に日本341名（男性143名，女性198名），韓国283名（男性141名，女性142名），中国325名（男性166名，女性159名），計945名から調査協力が得られた。

2-2. 質問紙：家族機能測定尺度（草田・岡堂，1993）

Olson（1985）の円環モデル（circumplex model）によるFACES III（Family Adaptation and Cohesion Evaluation Scales III）の日本語版を韓国語と中国語に翻訳して用いた（凝集性10項目，適応性10項目，5件法）。翻訳作業では，バックトランスレーションを経て僅かな表現のずれに対する修正を行った。このほかに，性別・年齢・学年・本人を含むきょうだい数について回答を求めた。

2-3. 調査の実施方法

各国の複数地域の4年制大学において授業時間中に集団で実施された。

3. 結果と考察

3-1. 調査協力者の基礎データの比較

調査に参加した各国の調査協力者の条件を検討するために年齢・学年・家族数・きょうだい数を比較した。その結果を表1に示す。平均年齢では韓国の大学生が日本と中国に比べて有意に高い結果となった（ $F(2, 947)=135.54, p=.000$ ）。この結果の背景としては，韓国の成人男性に課せられている兵役の義務や複数専攻を許可している韓国の大学教育システムが考えられる。今回の調査はいずれの国においても2年次配当講義の受講者を対象に実施したが，調査協力者の学年の結果においても韓国が日本・中国に比べて有意に高く（ $F(2, 944)=37.90, p=.000$ ），韓国の調査には兵役を終えた復学生や2年次以上の副専攻者が参加していたことが分る。また，家族数・きょうだい数においても3国間で有意差が見られた。そして，多重比較の結果から家族数ときょうだい数ともに日本が最も多く，韓国，中国の順となった。

表1 日・韓・中大学生の年齢・学年・家族数・きょうだい数の比較

変数	国家	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	多重比較
年齢	日本	341	19.89	1.17	136.64	0.000	韓国>日本*** 韓国>中国***
	韓国	284	22.00	2.32			
	中国	325	19.95	1.77			
	合計	950	20.54	2.02			
学年	日本	341	1.99	0.88	37.90	0.000	韓国>日本*** 韓国>中国**
	韓国	284	2.58	0.68			
	中国	322	2.08	1.09			
	合計	947	2.20	0.94			
総家族数	日本	320	4.48	1.41	34.65	0.000	日本>韓国** 日本>中国*** 韓国>中国***
	韓国	285	4.21	1.01			
	中国	323	3.71	1.10			
	合計	928	4.13	1.24			
兄弟数	日本	332	2.45	0.74	93.78	0.000	日本>韓国*** 日本>中国*** 韓国>中国***
	韓国	282	2.22	0.74			
	中国	307	1.61	0.89			
	合計	921	2.10	0.87			

Note. **: $p < .01$, ***: $p < .001$

3-2. 家族機能尺度の信頼性・妥当性の検討

韓国と中国の調査では、FACES IIIの日本語版尺度を韓国語と中国語に翻訳して使用しているので、翻訳された尺度の信頼性・妥当性を検討するために国別の因子分析（主因子解，バリマックス回転）を行った。ところが、各国の因子分析の結果からは想定していた元尺度の2因子構造にはならず、日本を含まない国においても3因子構造（スクリー基準）となった。そこで、強制的に2因子を指定し因子分析を再度行ってみたものの、元尺度の2因子のようには収束されなかった。

家族機能を評価するために開発されたFACES IIIは円環モデルに基づく自己評定式の質問紙である（Olson, Spenkle, & Russell, 1979）。FACES IIIは、家族機能を測定する尺度として最も知られている尺度の1つであり、家族が直面する状況的・発達の課題に応じて家族システムが変化可能な程度を表す「適応性（adaptability）」と家族成員間の情緒的結びつきの程度である「凝集性（cohesion）」という2つの次元で家族機能を測定するものである。さらに、Olsonらの円環モデルでは、「適応性」と「凝集性」の2つの次元を軸として家族機能を測定し、その得点が高すぎても低すぎても家族システムにおける機能不全があり、適応性と凝集性で中間水準の均衡の取れた群が最も意思の疎通が取れる適応的な家族システムを示すという曲線の解釈を行う。また、円環モデルでは、家族機能を測定する次元として「凝集性」と「適応性」のほかに、もう1つの次元として「コミュニケーション」を仮定している。ところが、この「コミュニケーション」次元は凝集性と適応性の両次元を促進させる働きを持つ次元として定義されてはいるものの、尺度構

表2 日・韓・中3国をプールした家族機能尺度の因子分析結果

新因子名	項目内容	FAC1	FAC2	FAC3
相互依存性	私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める。	0.74	0.20	0.18
	私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する。	0.68	0.28	0.19
	家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている。	0.61	0.20	0.21
	家族がまとまっていることは、とても大切である。	0.48	0.19	0.16
	私の家族では、みんなを引っ張っていく者（リーダー）が決まっている。	0.44	0.17	-0.04
凝集性	私の家族では、みんなで何かをするのが好きである。	0.28	0.78	0.21
	家族で何かをする時は、みんなでやる。	0.29	0.73	0.27
	私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている。	0.36	0.63	0.19
	私の家族は、みんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく。	0.37	0.63	0.22
適応性	家族を引っ張っていく者（リーダー）は、状況に応じて変わる。	0.03	0.17	0.50
	家族の決まりは、必要に応じて変わる。	0.29	0.13	0.47
	私の家族では、家事、用事は、必要に応じて交代する。	0.04	-0.10	0.45
	私の家族では、子供が自主的に物事を決めている。	0.02	0.20	0.44
	私の家族では、叱り方について親と子で話し合う。	0.16	0.18	0.43
	家族は、それぞれの友人を気に入っている。	0.22	0.14	0.38
Eigenvalue		5.12	1.51	1.16

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法（6回の反復で収束）

成上では1つの独立した下位尺度としてではなく「凝集性」と「適応性」の項目の中に含まれる形で尺度化されている。今回日本語版をそのまま使用した日本の因子分析の結果においても2因子ではなく3因子の構造となった背景には、翻訳作業の中で加えられた僅かな表現の修正によるものとして解釈するよりも、FACES IIIの持つ尺度構成理論上の特性が反映された結果であると言える。

日・韓・中での因子分析の結果が類似した3因子構造となったことから、次は3国のデータをプールして因子分析を行った。その結果、各国での因子分析の結果と同様の3因子が抽出された。しかし、FACES IIIの5項目がいずれの因子においても同程度の因子負荷量を示していたので、この5項目を除き再度因子分析を行った最終結果を表2に示す。

第1因子では、「私の家族は、困った時、家族の誰かに助けを求める」、「私の家族では、何かを決める時、家族の誰かに相談する」、「家族の方が、他人よりもお互いに親しみを感じている」、「家族がまとまっていることは、とても大切である」、「私の家族では、みんなを引っ張っていく者（リーダー）が決まっている」といった項目の因子負荷量が高かった。元尺度の凝集性を表す項目の中でも家族間の援助や相談を求めるといったコミュニケーションを表す項目の因子負荷量が高く、家族で結束することが大切でそれを引っ張るリーダーがいるといった内容の項目の因子負荷量も高い。リーダーを中心に家族が運命共同体として結束していて、家族成員間の相互相談と援助要請といった意思の疎通がなされることがその内容であることから、第1因子を「相互依存性」の

因子 (FAC1) として解釈した。

第2因子では、「私の家族では、みんなで何かをするのが好きである」、「家族で何かをする時は、みんなでやる」、「私の家族では、自由な時間は、家族と一緒に過ごしている」、「私の家族はみんなで一緒にしたいことがすぐに思いつく」の因子負荷量が高く、元尺度で家族の情緒的絆と家族成員間の結束を表す凝集性に分類される項目が収束されていることからこの因子を元尺度のままの「凝集性」の因子 (FAC2) として解釈した。

第3因子では、「家族を引っ張っていく者 (リーダー) は、状況に応じて変わる」、「家族の決まりは、必要に応じて変わる」、「私の家族では、家事、用事は、必要に応じて交代する」、「私の家族では、子どもが自主的に物事を決めている」、「私の家族では、叱り方について親と子で話し合う」、「家族は、それぞれの友人を気に入っている」の因子負荷量が高く、元尺度の家族成員間のルールや役割における融通性を表す適応性の項目が収束されていることから元尺度のまま「適応性」の因子 (FAC3) と解釈した。

今回家族機能尺度として使用した FACES III の数量化とその解釈についてはさらに明記すべき点がある。Olson ら (1979) の家族機能の円環モデルでは、適応性と凝集性を軸にその得点が中間水準の均衡の取れた群が最も適応的家族システムを示すという曲線的解釈を行う。しかしながら、家族の凝集性と適応性に関するその後の研究では、Olson らの円環モデルの曲線的解釈とは一致しない結果が多い。こうした研究結果は、円環モデルの曲線的解釈が確認されないだけでなく、家族の凝集性と適応性が高いほど意思疎通がより効果的であるという線型的解釈を支持している。例えば、高校3年生と大学新入生を対象とした比較的新しい研究 (Perosa & Perosa, 2001) では、適応性・凝集性と家族間の意思疎通の線型的関係が確認され、円環モデルの解釈を否定した。この点に関連して、Olson, Portner, & Lavee の研究 (1985) でも円環モデルによる曲線的解釈は臨床群の場合の解釈としては妥当であるが健常群の家族の場合はむしろ線型的解釈の方が妥当である可能性をすでに指摘しており、健常群の家族を対象とした新たな研究 (Olson & Lavee, 1991) では線型的解釈を受け入れている。

さらに、FACES III の解釈においては文化的側面も考慮すべきであるという報告がある。米国のアジア系大学生を対象とした Kim (2002) の研究では、適応性と凝集性の得点が中間範囲の均衡家族群よりも両得点が共に高い家族群が意思疎通をより円滑に行っており、家族関連の問題もより少なかったと報告した。そして、円環モデルは家族機能における文化的相対性については十分考慮されていないことやアジア系の家族においては線型的解釈がより妥当であると指摘した。

加えて、FACES III の信頼性と妥当性を検討した日本の草田 (1995) の研究でも凝集性得点の解釈においては円環モデルの曲線的仮説が支持されず、線型的解釈の可能性を示唆した。

こうした先行研究の結果並びに今回の FACES III の因子分析の結果を総合的に考慮すると、円環モデルによる FACES III の本来の数量化と解釈法を適用するよりは「相互依存性」・「凝集性」・「適応性」という3因子の結果を用いた線型的解釈によって3国を横断的に比較する方が今回の研究目的に照らし合わせてより妥当であると判断された。

次に、3因子の信頼性を検討するためにクロンバックの α 係数を求めた結果、それぞれ0.75

(FAC1), 0.88 (FAC2), 0.67 (FAC3) であった。第3因子の α 係数が僅かに低いが、いずれの因子においても信頼可能な一貫性を示していることが確認された。

3-3. 家族機能による家族意識の比較

3国の家族意識を比較する前に、年齢・学年・同居家族数・きょうだい数において日・韓・中の大学生間に有意差が見られたので、こうした変数が家族意識に及ぼしている可能性を確認するために、国籍・年齢・学年・同居家族数・きょうだい数・性別の6つの変数を説明変数、各家族機能因子の得点を目的変数とした重回帰分析を行った。その際、国籍・性別は比率尺度と見なし強制投入した。その結果を表3に示す。

三国の標本が人口統計学的面で同質ではなかったものの、重回帰分析の結果では、3つの家族機能に対して一貫した有意な偏相関を示したのは、国籍と性別のみであった。従って、調査協力者の変数の中で一貫して有意な説明力を持つ国籍と性別を独立変数、各家族機能因子を従属変数とする2要因の分散分析を行った。その結果、すべての家族機能において性別と国家それぞれによる主効果が見られたが、性別と国家による交互作用は見られなかった。その詳細な結果を表4に示す。

まず、性別による比較では、いずれの家族機能においても女子大学生が男子大学生に比べて有意に高く、家族との相互依存 (FAC1) と情緒的絆 (FAC2) をより強く報告し、家族間の役割交代や柔軟な相互作用 (FAC3) をより多く行っていると報告した。

家族機能における男女間の差は、ジェンダーによる社会化、すなわちジェンダーオリエンテーションの影響であると考察される。女性の伝統的な役割として、円満な対人関係を志向し、それを維持するための情動的表現やコミュニケーション能力を意味する女性性 (Femininity) を女性はその社会化の中で男性よりも多く取り入れており (Bem, 1981), こうしたジェンダー・ロール (gender roles) に関連した性格的特性が今回の家族機能における性差に反映されていると解釈できる。

表3 各家族機能因子に対する重回帰分析の結果

説明変数	目的変数		
	相互依存性	凝集性	適応性
	β	β	β
国籍	-0.294 ***	-0.237 ***	0.004 ***
年齢	0.059 <i>n.s.</i>	0.015 <i>n.s.</i>	0.130 *
学年	-0.050 <i>n.s.</i>	-0.010 <i>n.s.</i>	-0.053 <i>n.s.</i>
同居家族数	-0.022 <i>n.s.</i>	0.004 <i>n.s.</i>	-0.013 <i>n.s.</i>
きょうだい数	0.023 <i>n.s.</i>	0.052 <i>n.s.</i>	0.025 <i>n.s.</i>
性別	0.113 **	0.079 *	0.180 ***
<i>R</i>	0.329 ***	0.254 ***	0.202 ***

Note. ***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, *n.s.*: not significant.

表4 家族機能因子における国籍と性別の2要因による分散分析

因子	要因		<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	多重比較
相互依存性 (FAC1)	国家	日本	333	16.59	4.55	88.092	0.000	中国>韓国***
		韓国	283	19.29	3.83			中国>日本***
		中国	318	20.43	3.31			韓国>日本***
	性別	男子	441	18.31	4.24	15.001	0.000	男性<女性***
		女子	493	19.07	4.28			
	国家×性別						2.619	0.073
凝集性 (FAC2)	国家	日本	337	9.75	3.89	34.161	0.000	中国>日本***
		韓国	283	11.59	3.85			韓国>日本***
		中国	320	11.84	3.36			
	性別	男子	444	10.64	3.60	12.337	0.000	男性<女性***
		女子	496	11.35	3.99			
	国家×性別						1.539	0.215
適応性 (FAC3)	国家	日本	339	19.95	3.70	50.960	0.000	中国>日本***
		韓国	281	20.33	3.29			中国>韓国***
		中国	320	22.49	3.58			
	性別	男子	445	20.59	3.87	11.026	0.001	男性<女性***
		女子	495	21.23	3.55			
	国家×性別						1.311	0.270

Note. ***: $p < .000$, *n.s.*: not significant.

また、国家による主効果が見られたので、各家族機能における3国間の多重比較を行った結果、国別に次のような結果を示した(図1-3, 参照)。

まず、中国はすべての家族機能の平均値が日本と韓国に比べて最も有意に高かった。すなわち、中国の大学生は、家族との絆や結束(FAC2)、家族への相談・援助を求める相互依存(FAC1)が最も高く、状況に応じての家族間の役割交代(FAC3)も最も多く行っていると報告した。

中国では急激な人口増加を抑制するために1970年代に入って「计划生育(計画出産)」が提唱され、1979年からは「一人っ子政策」が推進された。こうした政策によって急激な人口増加は抑制できたものの、中国では一人の子どもを中心とした家族形態となり、家族力動には大きな変化が齎されたことが指摘されている(陳・王, 1997)。すなわち、一人っ子として産まれた中国の子どもは、親の期待を一身に背負い、両親や祖父母に丹精込めて育てられる。また、勉学に専念しエリートとして成長できるように大学生の子どもに学費や生活費のすべてを援助する家庭が多い。社会主義の下で「夫は外、妻は内」という夫婦間の伝統的な役割分業意識も日本・韓国に比して弱い中国では両親は共働きで懸命に子どもを教育し援助する(李, 2004)。このような中国の家族をめぐる社会的状況と背景に、今回の調査でも中国の大学生が家族への絆の高さや家族間の柔軟な役割交代の家族機能を最も高く報告する結果に繋がっていると考察される。

次に、韓国は家族との意思疎通に基づく相互依存性(FAC1)において、中国よりは低い日

家族機能から見た大学生の家族意識

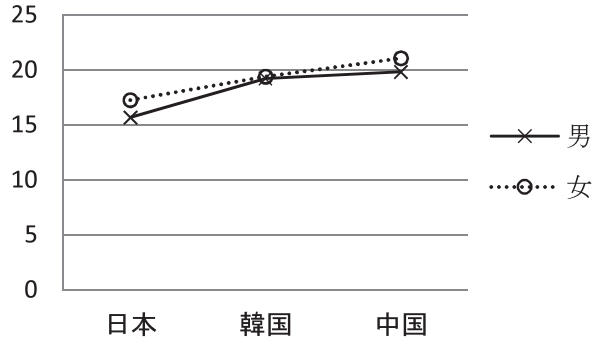


図1 相互適応性 (FAC1) における比較結果

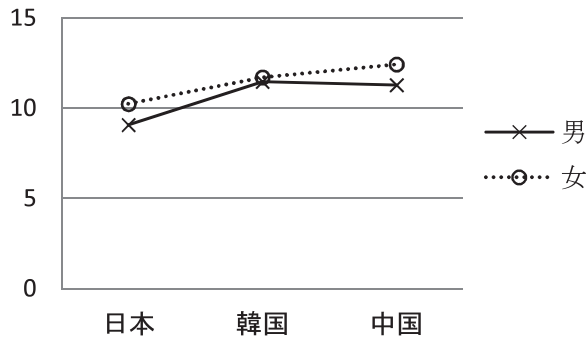


図2 凝集性 (FAC2) における比較結果

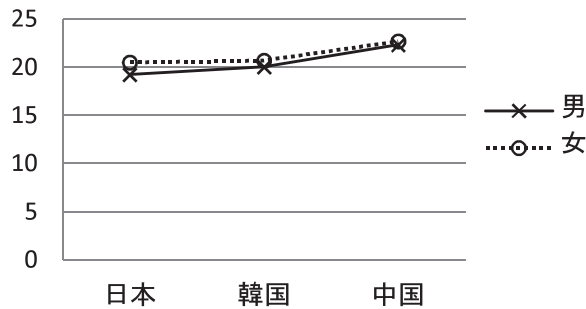


図3 適応性 (FAC3) における比較結果

本より有意に高い得点を示しており、家族への情緒的結びつき (FAC2) においては中国との有意差がなく日本よりは有意に高かった。そして、家族成員間の役割交代や柔軟性 (FAC3) では、中国より有意に低いと日本との有意差は見られなかった。

韓国の歴史上、儒教は15世紀の朝鮮王朝から建国理念とされ、儒教の中心的教えである「忠孝思想」は祖先を崇拝する宗教的イデオロギーでもあり (崔, 2010; Hoobler & Hoobler, 1994), 近代までの国家の統治理念としての役割を果たしてきた (吉田・秀村, 2000)。さらに、朝鮮王朝の伝統的統治・経済秩序が崩壊した後も儒教の教えは外来の文化と複雑に結合して残存し、

韓国の社会生活全般に亘って人々の行動規範として息づいている（金・李，2007；Kim & Park, 2003）。

比較文化心理学的立場から韓国の親子関係の特徴を概観した Bang（2000）の研究では，韓国家庭の一般的養育態度は，欧米の権威型とアジアの権威主義が混合した「厳父慈母」型であると述べ，韓国家庭の家族関係は「孝」の原理である「父子有親」の情緒や「親子間の一体感」などで特徴づけられるとした。また，急変している社会的情勢の中でも家庭の養育態度や親子間の相互作用においては儒教的伝統が比較的維持されていることもその特徴の1つであると述べた。

こうした韓国の儒教的価値観や養育態度に関する先行研究結果を鑑みると，韓国の大学生の家族意識からは家族内での親子間また夫婦間の役割分業が中国と比べて残っており，日本と比べては家族での情緒的繋がりを強く抱いている様子が明らかであり，儒教文化の家父長制的家族力動の特徴が覗かれる。

最後に，日本は家族への相談・援助要請といった相互依存（FAC1）が3国の中で最も低く，家族との情緒的結びつきを表す凝集性（FAC2）においては中国と韓国に比して有意に低く報告した。そして，家族成員の役割交代などの柔軟性を表す適応性（FAC3）においては，日韓での有意差はなかったが，中国より有意に低いと報告された。

日本では，儒教の「忠孝思想」が，親への孝行に優先して国家への忠誠が強調されることによって天皇制国家としての統治をバックアップする思想であったことから戦後は忠孝に対する嫌悪的感情へと結びつき，日本の学校教育では忠孝教育が姿を消すようになったとされる（細江ら，1991）。それと同時に戦後の急速な経済復旧と発展を成し遂げる中で日本社会の就労構造と家族形態の変化が招かれ，こうした家族をめぐる経済・社会的変化による最も顕著な心理社会的問題として相互扶助・教育という伝統的な家族機能の縮小が繰り返し指摘されてきた（石川1997；小此木1983；滝川1994）。加えて，急速な経済発展は性別による就業上の役割分業を招き，日本女性の社会進出の遅れもずっと指摘されてきた。1999年6月に成立した「男女行動参画社会基本法の第4条」にも「社会制度や慣行が『男は仕事，女は家庭』といった性別による固定的な役割分担等を反映して，結果として女性の就労等の活動の選択をしにくくするような影響等を及ぼし，男女共同参画社会の形成を阻害する要因となる恐れがある場合があることから，男女共同参画社会の形成に当たって，社会制度・慣行の及ぼす影響に配慮することを基本理念として定めたものです……」と記されている。

3国の中で日本の大学生が最も家族機能を低く報告しており，その結果の背景にはこうした戦後日本社会が抱えてきた社会的状況が関連していることが考えられる。

4. 終わりに

本研究では，日・韓・中の大学生を対象に家族機能の側面から家族意識を調査し，比較検討した。その結果，3国の大学生が報告した家族意識には明らかな差が認められた。

家族機能尺度である FACES III の線型的解釈を採用すれば，中国の大学生が最も家族との絆が

強く意思疎通が図れており、家族成員間で柔軟な役割交代が行われていた。その反面、日本の大学生はこうした家族との絆や相互作用において最も関わりが乏しく、韓国の大学生は日・中の中間レベルの家族機能を示した。

しかしながら、本研究で測定した家族機能のデータは自己評定法による主観的なデータであり、各国の大学生が抱く家族への意識を反映した結果である。従って、3国の横断的比較によって本研究で明らかになったことは、日・韓・中国の大学生の主観的な家族意識の違いであり、比較文化的側面から各国の特徴を考察したことに過ぎない。

家族は個人にとって最も重要なサポート源の1つである故に個人の心理社会的適応においても非常に重要な役割を果たす変数である。今回の研究では3国の大学生の家族意識を単純比較することに留まっており、各国の大学生のこうした主観的な家族意識が本人の社会的適応においてどのような働きをするかについては検討されていない。

今回は国際比較のために主観的な家族意識を横断的な単純比較によって検討を行ったが、家族機能と心理社会的適応に関する3国の比較を可能にするためには、主観的な家族意識のみならず家族機能に関する客観的な指標を含めて、各国の社会文化的変数をも取り入れたさらなる検討が望まれる。

謝辞

中国での調査にご協力頂いた立命館大学応用人間科学研究科教授吉沅洪先生に心から謝意を表します。

引用文献

- Bang, H. J. 2000 韓国社会における親子関係の特性と発達心理学的探索. *Korean Journal of Psychological and Social Issue*, Vol. 6(3), 41-65.
- Bem, S. L. 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. *Psychological Review*, Vol. 88, 354-364.
- 裴海善 2012 韓国の少子化と政府の子育て支援政策：日本と韓国における少子化対策としての有効な子育て支援施策の比較研究. *アジア女性研究*, Vol. 21, 24-42.
- 崔吉城 2010 『韓国人の祖上崇拜と孝』, 民族院。
- 陳会昌・王莉 1997 1-10歳の子どもをもつ親の教育観念. *心理発展と教育*, Vol. 1, 40-43.
- 石川実 1997 『現代家族の社会学』, 有斐閣ブックス。
- 細江容子・竹田久美子・袖井孝子・鄭淑子・徐炳淑 1991 日・台・韓大学生の老人に対する態度と老後責任意識に関する研究(第1報): 研究枠組と基本的属性. *日本家政学会誌*, Vol. 42(4), 297-303.
- Hoobler, T. & Hoobler, D. 1993 *Confucianism*. New York: Chelsea House Publisher.
- Kim, A. E. & Park, G. S. 2003 Nationalism, Confucianism, Work Ethic and Industrialization in South Korea. *Journal of Contemporary Asia*, Vol. 33(1), 37-49.

- Kim, K. K. 2002 Family functioning, intergenerational conflict, and psychological symptomology of Asian American college students. *Dissertation Abstracts International: Section B: The Science & Engineering*, Vol. 63, 2589.
- 金泰憲・李允碩 2007 儒教の国・韓国の異変：家族観の変化と少子化. *国際文化研究*, Vol. 11, 119-128.
- 草田寿子 1995 日本語版FACES IIIの信頼性と妥当性の検討. *カウンセリング研究*, Vol. 28(2), 24-32.
- 李建新 2000 世界人口格局中的中国人口転変及其の特点. *人口学刊*, Vol. 5, 3.
- 李卓 2004 『中日家庭制度の比較研究』, 人民出版社.
- 松江暁子 2012 韓国における少子化とその政策対応人口問題研究, 松江暁子 2012 韓国における少子化とその政策対応人口問題研究, Vol. 68(3), 32-49.
- 森岡清美・望月嵩 1983 『新しい家族社会学』, 培風館.
- 小此木啓 1983 『家庭のない家族の時代』, ABC出版.
- Olson, D. H. and Lavee, Y. 1991 Family types and response to stress. *Journal of Marriage and the Family*, Vol. 53(3), 786-798.
- Olson, D. H., Portner, J., and Lavee, Y. 1985 FACES III. St. Paul, MN: Family Social Science, University of Minnesota Press.
- Olson, D. H., Spinkle, D. H., and Russell, C. S. 1979 Circumplex model of marital and family system1: cohesion and Adaptability dimensions, family types and clinical application. *Family Process*, Vol. 18, 3-28.
- Ogburn, W. F. 1929. The changing family. *Publications of the American Sociological Society*, Vol. 23, 124-133.
- Ogburn, W. F. and Nimkoff, M. F. 1955 *Technology and the changing family*. Boston: Houghton Mifflin.
- Perosa, L. M. and Perosa, S. L. 2001 Adolescent perceptions of cohesion, adaptability and communication: Revisiting the Circumplex model. *Family Journal-Counseling and Therapy for Couples & families*, Vol. 9(4), 407-419.
- Touliatos, J., Perlmutter, B. F., & Straus, M. A. 1990 *Handbook of Family Measurement Techniques*. Newbury Park: Sage.
- 滝川一廣 1994 『家庭の中の子ども 学校の中の子ども』, 岩波書店.
- 吉田光男 2004 『韓国朝鮮の歴史と社会』, 放送大学教育振興会.